

中經

論壇

経営支援NPOクラブ 川上 博史



「8050問題」とどう向き合うか

こうした現状を放置すれば、事態はさらに深刻化し、孤立死、一家心中、親の死体遺棄、親の年金・生活保護費の不正受給、二ートによる生活保護費の受給増加など、現在でも散発的に起こっている

事業が頻繁に起これ
うることが想定され、8050問題への迅速な対応が今求められている。

「ひきこもり新聞」編集長の木村ナオヒ
氏は「ひきこもりは誰もがなる可能性
があるので、偏見をなくすこと。家族が
支えとなるので本人の意見をできるだけ
聞き、決して自助に

してはいけない。さらに家族のサポートだけでは限界があるため、社会全体で支えるべき」と主張している。そして、自らがひきこもりであること自覚した上で、専門家のサポートを受け入れ、無理のない範囲でできるだけ人と会う機会を増やすことが必要だと強調している。

この場合、趣味がひきこもり解消に大切な手段となりうるので、家庭・職場（学校）以外でリラックスできる居心地のいいサードプレイスをいかに確保するかが重要な解決手段となり得る。息抜きができる、同じ趣味や悩みを抱えた人達がつながりの機会を増やせる場所として空き家を活用し、そこで専門家がサポートする仕組みが効果を上げているという報告がなされている。こうした好事例を水

「8050問題」という社会問題をご存知だろうか。これは50歳代のひきこもりの子の生活を、80歳代の親が支えるという親子関係の深刻な問題である。「ひきこもり」については、以前は、いじめによる不登校が問題視されていたこともあり、若年層のみの問題であるかのように捉えられていた。

近年、ひきこもりから立ち直れなかつた人および抱える家族が共に、全国的に高齢化したことで、親が経済的、精神

サードプレイスになる居場所とは

近年、ひきこもりから立ち直れなかつた人および抱える家族が共に、全国的に高齢化したことで、親が経済的、精神

ひきこもりはなるべく多く
いという。15歳から34歳まで
の若者を対象にした、2011
年の政府の調査では54・1
万人という結果が報告されて
いるので、全国で約115万
人がひきこもりの状態である
と推計される。